



# 講演



## 「夢を叶えるジョンマン・スピリット」 ～はじめて世界を見た日本人ジョン万次郎～

講師：ジョンマン語り部 垣内守男 氏

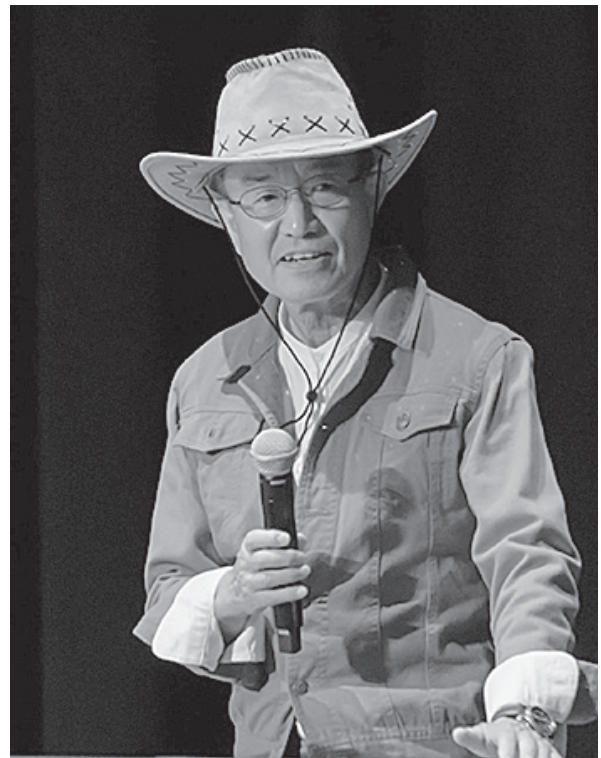
「Hello everyone. I'm John Mung. Nice to meet you.」というようにジョン万だったら、はじめると思っています。今日は、「はじめて世界を見た日本人ジョン万次郎」ということで、少しお時間をいただきます。

皆さん、高知といえば坂本龍馬ですよね。でも坂本龍馬にも影響を与えた、初めて世界を見た日本人、ジョン万次郎という存在。これを私は大事にしたいなと思っているわけです。しばらく、万次郎の紹介にお付き合いいただきたいと思います。

万次郎は、世界に通用する日本にしたいと思って幕末時代を駆け抜けました。そのことが、「日本を洗濯するぜよ」と言って駆け抜けた坂本龍馬にも影響を与えています。坂本龍馬がしたためたと言われている「船中八策」、その中には、万次郎が見てきたアメリカ事情、政治のこと、身分のこと、そういったものが強く色濃く反映されていたわけです。

そして、万次郎は、とにかく一步を踏み出すんだ、そういうDNAを持っていたように私は思います。そして、そのことがジョンマン・スピリットというものをつくりあげたというふうに感じているわけです。

皆さんに質問を用意しています。まず、イントロの質問なんですけれども、この画面には、初めて世界を見た日本人「ジョン万次郎」、そして、ジョンマン・スピリットの「ジョンマン」、そして銅像の方にある「中浜万次郎」と、3つの呼び名が記されています。



実は、万次郎自身はこの中に呼ばれたことのない、万次郎自身も使ったことのない呼び名があります。さてそれはどれでしょうか、ということなんですけれど。この最初のイントロクイズの正解は、後ほど申し上げます。

ジョン万次郎ですが、その生涯は大きく10年ごとに3つの時代に分かれています。まず、最初が「体験時代」。14歳から24歳まで。無人島生活を強いられたり、そして、アメリカで生活をするようになったりと。まあ、当時の日本人では想像を絶するような体験をしていますので、体験時代と呼んでおくことにします。



それから、その次の24歳から34歳までの10年間。この時代は、「実践時代」と私は呼んでいます。日本に無事に帰って来て、武士の身分になったり、そして、咸臨丸という船で日本の役人をアメリカに連れて行ったり、そういう近代日本の幕開けに向けて大変大きな実践をしていますので、実践時代というふうに私は呼んでいます。

それから、咸臨丸の航海が終わって、34歳から44歳までの10年間。この時代は、日本で英語の教育をしたり、そして、航海術を普及したり、最後には東京大学の最初の教授、開成学校とそのときには言っていたんですけども、そのこの教授になったりというような、近代日本の幕開けと国際化に大きな貢献をしていますので、「貢献時代」と私は呼んでいます。

中でも注目すべきは、体験時代の14歳から24歳まで。この時代に、諦めない、投げ出さない、そして人の役に立つという、ジョンマン・スピリットをつくりあげました。今日はこのジョンマン・スピリットをつくりあげた体験時代を中心に、お話をさせていただきます。

万次郎は、高知から100キロメートル以上西の方にある土佐清水市の中浜というところで生まれました。5人兄弟ですが男は2人で次男です。万次郎の家は半農半漁で、万次郎が9歳の時、お父さんが亡くなってしまいます。そして、お母さんがひとりで5人の子どもをわずかばかりの畑で野菜を作ったりしながら育てていきます。大変苦しい状況になってしまいます。

万次郎も早く一人前になって家の手伝いをしたい。そして、働いて家を助けたいと思っていたんですが、その当時、働くといえば漁業なんですけれども、船に乗るのは14歳になってからという決まりがありました。なぜかという、船は大変危険なので、14歳までに船に乗って、もしものことがあったらあとが絶えてしまうので、当時は14歳までは船に乗って手伝いをしたりすることができなかったのです。

そういった苦しい生活が5、6年続くんなんですけれども、年が明けたら万次郎が14歳になるという時です。縁あって宇佐の漁師、宇佐というのは、高知から約20キロ西の方にある漁師町なんですけれども、そのこの漁師さんが清水に来ていて万次郎をあずけることになります。

そして、12月の末に万次郎を宇佐の漁師のもとにあずけるんですが、年が明けて、やっと万次郎も14歳になり漁に出ます。船頭の伝蔵、そして、その弟の重助24歳。そして、そのさらに弟の五右衛門15歳、これは3人兄弟です。そして、隣の家の寅右衛門25歳、そして、清水から来た万次郎14歳、この5人で初漁に出ます。



4、5日分の食糧を積みこんで万次郎はワクワクしながら漁に出たんですけど、最初の2日間は何も捕れませんでした。3日目に網を下ろしていると魚の大群が見えてきます。網にかかるわ、かかるわ、もう大喜びで一同は網をあげていました。すると、西の空が真っ赤に染まってきました。と思ったら急に黒い雲が辺り一面を覆うようになっ

て、ビューっと強い北風が吹いてきます。この当時の風はアナセといって漁師仲間では大変恐れられていました。船頭の伝蔵もこの風のおそろしさを充分知っていますので、これは魚を取り込む暇はない。早く陸に向かって漕がなければならぬということで、引き揚げていた網も切り離して一目散で陸に向かって漕ぎ始めます。

ところが、当時は手漕ぎの船ですので、風に阻まれ波に阻まれ、なかなか陸に近づけません。足摺沖ぐらいいまで来た時でしょうか、手漕ぎの櫓がバキッと折れてしまいます。櫓が折れた万次郎達は風に吹かれ、波に流されるままとなって漂流することになります。

そして、5日間ほど流された時、もう食糧も尽きて、朦朧としている時ですが、沖にぼんやりと島らしきものが見えてきました。今でいう鳥島ですね。運良く万次郎達は、この黒潮の流れからはじき出されて鳥島の近くにたどり着いたのです。

櫓がありませんので、皆で手で船べりを漕いで島に近づきます。そして、比較的岩の低いところを見つけて、ここで上陸しようということになります。皆で力をあわせて、タイミングをあわせて、ちょっと波があったんですけども、波間を見計らって上がろうとします。ところが運悪くその時に大波が来ます。そして船は岩肌に打ち付けられて木っ端微塵。万次郎達も海に放り出されます。ただ、岩が低かったもので辛うじて皆で何とか泳いで上がります。

そのときに、3人兄弟の2番目の重助は骨折をしてしまいます。骨折した重助を皆で抱きかかえながら崖を上がって島の上に行ってみます。どうやら周りには畑らしきものもなく、無人島らしい。まあ、寝る所を見つけようということで、洞窟らしいものがあったので、そこをねぐらにすることにします。ただ、よく見てみると、どうやら以前にもそのような人がいたらしくて、人骨のようなものがそこにはあります。万次郎達は自分達のこれからを思うと背筋が凍るような思いがしたわけ

です。

無人島ですから、食糧にも困る。さて、何を食糧にしようか。水もない。ただ、周りには鳥が群れています。アホウドリですね。アホウドリは人を怖がらないので、すぐに捕まえることができました。そして、アホウドリを捕まえて、打ち付けられた船の残骸から釘を抜き取ってきて、それで鳥を捌いて、干し肉にしたり、塩で洗ったりして食べて、しばらくは命をつなぎます。ただ、このアホウドリは渡り鳥ですので、時期が来たら北へ飛んで行ってしまいます。4ヶ月後、アホウドリは全て北の方に飛んで行ってしまいました。食べる物も一切ない、水もない。絶体絶命の状況になってしまいます。

そんなある朝、朝早く目覚めた五右衛門が沖を見ていると、何やら白いものが見える。どうも船かもしれない。万次郎も来て一緒に見えています。すると、段々と大きくなってきて、確かに船だ。何ヶ月ぶりの船です。この機を逃したら生きるチャンスは、もうない。そこで、万次郎や仲間の皆はボロを振って、船に向かって叫びます。「おい」。ただ、船は万次郎達に気が付いてくれる様子もなく、島の影に見えなくなってしまいます。ああ、もうこれで俺達の命は尽きた。一同がっかりしてしまいます。

ただ、万次郎は、どうしても諦めることができません。そして、年の近い五右衛門に、「五右衛門、もしかしたら、さっきの船が島の陰に停まっているかもしれない。島の裏側に行ってみようよ」と誘いますけれども、五右衛門は腹が減って、その上、気も抜けて、「もういいよ」と言ったきり話にのってきません。そこで、仕方なく、万次郎はひとりで崖の山道をまわりながら島の裏側に行ってみます。すると、そこに大きく帆を張った先程の船がとまっていた。そして2艘のボートが島に向いて近づいて来ています。

1841年6月27日。万次郎が、仲間の命と自らの運命を掴んだ日です。船の名前はジョン・ハウラ

ンド号、船長はホイット・フィールド船長といます。この時、諦めないということが、どれほど大事かということが万次郎に身にしみてわかりました。そのことは生涯大事にし、そして、子孫達にも「絶対に諦めるな、何があっても諦めるな、そのときに何ができるかを考えよ」というようなことを言い伝えております。

また、ここでクイズです。

ジョン・ハウランド号はなぜ停泊していたのか、という三択です。1番 日曜日だったから休んでいた。2番 島を調べようとしていた。3番 実は万次郎達に気が付いていた。

正解は、1番。日曜日だったからです。実は、もう既に、アメリカは7日制で動いていましたので、日曜日は必ず休むということになっていたんですね。そして、船の場合は休む時には、船員達は大海原で休むよりは、何か島があるようなところで休む。島があるということは、そこに生き物がいる。一番いい生き物というのは亀なんですね。亀でもさがしてみよう。亀は本当に良い肉で、船員達は生肉がほしくなると亀を探して食べるんですね。生肉というのは鉄分補給の最大の食糧なんですね。ですから、このときも日曜日だったから、島の近くに行ってみようということでボートを降ろしていたということなんです。



さて、万次郎達を救助したジョン・ハウランド号、航海をしながらハワイに立ち寄ります。可能性は低いけど帰国できたらいいなというような思いで、ホイット・フィールド船長は全員をハワイに下ろします。

ただ、ホイット・フィールド船長の胸中は、万次郎をアメリカに連れて行ってみたいなくなっていました。どうせ助かる見込みが少ないなら、万次郎を鯨獲りにしてみたいという思いになったんですね。

万次郎も、最初は漁師になりたいと思っていたんですけども、この頃は鯨獲りになりたいなという思いが、沸々と湧きあがってきていました。でも、親代わりの船頭の伝蔵に相談しないことには何ともなりませんので、伝蔵に相談をします。そして、ホイット・フィールド船長も身振り手振りで伝蔵に伝えてくれます。伝蔵も、ここにいてもどうなるかわからないので、お前の思うようにしなさいということで、万次郎はホイット・フィールド船長について行くことにします。

万次郎は皆から可愛がられ、ジョンというニックネームを付けられて「ジョンマン、ジョンマン」と呼ばれるようになります。本当に楽しい航海がそれから続きます。救助されてから約2年後、船は母港のニューベッドフォードという港町に着きました。万次郎もこの時、初めて上陸します。万次郎が初めてというより日本人が初めてアメリカに上陸した日です。1843年5月7日のことでした。

船長の家は、その対岸のフェアヘーブンという町にありました。フェアヘーブンでの生活は、船長と奥さんと万次郎との3人の暮らしです。船長は農場も経営していましたので、農場で農作業や牧畜なんかをしながら生活をしていました。

万次郎は、2年間くらいの船乗り達との生活で、英語は話せるようになっていました。でも、船員英語で完璧な英語ではないので、ホイッ

ト・フィールド船長は、万次郎にきちんとした英語を習わせたいと思って、ストーンスクールという地元の小学校に入らせます。そこでABCを習いますが、これは万次郎が、初めて習う文字です。万次郎は日本では寺子屋にも行っていませんので、自分の名前のまんじろうくらいは平仮名で書けたかもしれませんが、文字を知りません。ABCが初めて学ぶ文字ということになります。そして、そこでは大変熱心に勉強します。

ホイット・フィールド船長はストーンスクールで一生懸命勉強する万次郎を見て、1年後には、バートレット・アカデミーというところに行ってみないかとすすめます。そこは航海の勉強をして、船員になるための学校です。そして、万次郎もお世話になる身で大変申し訳ないと思いつつも、ホイット・フィールド船長の好意に甘えて、バートレット・アカデミーに通うことになります。

そこで、万次郎は申し訳ない気持ちから、働きながらバートレット・アカデミーに行こうと思いつき、樽屋で働くことを決めます。そして、樽屋に住み込んで、バートレット・アカデミーに行くことにします。樽屋というのは、この当時、よくあったようです。というのも、捕鯨船は油を入れる樽が必要なんですね。だから至る所に樽屋さんがあったようで、そのひとつの樽屋で働いてバートレット・アカデミーに通学します。

ところが、その樽屋の食糧事情が大変悪くて万次郎は体を壊します。そこで一度、船長の家に帰って奥さんの手料理で体調を回復します。奥さんも、もうここから学校に行きなさいよって言うってくれるんですけども、万次郎は、一度決めたことはどうしても最後までやり通したかった。そこでもう一度樽屋に住み込んでバートレット・アカデミーに通います。そして、なんと、外国人に混じってトップで卒業します。どれほど勉強家だったのかということが、このことからわかります。

この時、万次郎は、投げ出さないということの大事さをつくづく思ったのです。投げ出さないという気持ちがあったからこそトップで卒業できたんでしょう。奥さんの言葉に甘えて家の方からバートレット・アカデミーに通っていたら、トップで卒業ということにはならなかったのではないかとこのふいに私は思っているところです。

バートレット・アカデミーを卒業した万次郎、フランクリン号という船のデビス船長から声をかけられます。「俺の船に乗らないか」と。デビス船長というのは、万次郎を救助した、ジョン・ハウランド号で鋸打ちをしていた人で、万次郎のことを大変気に入っていました。卒業したら俺の船に乗らないかということで声を掛けてくれて、万次郎も船には乗りたいので了解をしますけども、一番下の身分の食糧係として乗り込みます。

そして、ニューベッドフォードを出航して、ボストンに一度立ち寄ります。ボストンというのは、その当時大変大きな港町で、そこでは何でも手に入ります。フランクリン号の船員達もそこで、これから3年にも4年にもなる航海のためにいろんなものを仕入れて準備をします。万次郎も必要なものを買って準備をします。ただ、そのボストンで見たものに万次郎は大変驚きます。

ここでクイズがあるんです。

ボストンで万次郎が大変驚くものを見たんですけども、その驚いたものは何か。1番 汽車。2番 戦車。3番 軍艦。

正解は3番 軍艦ですね。これはのちに万次郎を大変不安な思いにさせるものでした。

航海に出た万次郎、ジョン・ハウランド号の楽しかった思いがいっぱいですので、船の上の生活はさぞ楽しいだろうと思っていたところが、そうではなかった。専門学校を出ているということで、周りの船員達は万次郎をやっかみの目で見っていたようです。そして、万次郎自身も、俺は勉強しているんだぞ、俺は技術があるんだぞというこ

とで、どちらかという自分のことを鼻にかけていたのかもしれませんが。

そして、半年ほど航海をして、船がインド洋沖のニューアムステルダム島の付近を通っている時に、船員達が何やら船縁でワイワイやっています。見てみると、2メートルくらいあったようですが、大きな亀が船に沿って一緒に泳いでいます。船員たちは生肉がほしくてたまらなくなっている時期ですので、鉞を打ち込んで亀を仕留めようとします。しかし、亀の甲羅に跳ね返されて何ともなりません。悔しがっています。それを見ていた万次郎、ここは食糧係の俺の仕事だと思って、ナイフをくわえて、ザブーン。亀の横に泳ぎ着いて、持っていたナイフで首をぐいっとやります。すると、辺り一面に亀の血が広がります。それを見て驚いたのは船員達です。周りはサメが泳ぐ海です。サメが近づいて来るに違いありません。

「ジョンマン、早く戻れ」と縄梯子を下して、「早く戻れ」と叫びます。ただ、万次郎は、「ダメだ、ロープを下ろせ、ロープだ」と言ってロープを投げてもらって亀を手際よく括りつけて、「よし、引き上げろ」と合図をして、自分も縄梯子に手を掛けます。その時に近くではサメの背びれが見え隠れしていたようです。

そして、船上に戻った万次郎、船員達からは拍手喝采で迎えられます。とにかく海の男たちは、勇気のある者でないと認めてくれません。この一件で万次郎の勇気を船員達は認めることになったんですね。それ以後は気持ちよく航海をすることができるようになります。

そして、船長や船員達は万次郎の気持ちを察しているのです。琉球沖を通ってくれた。そして、琉球沖に差しかかった時に、4、5人で小船を下ろして、ちょっと上がって見ようかというような話になって上陸してみようとしています。ところが、役人らしき人物が現れてきて、話がわかりません。向こうの言っていることは分かるのに、こちらの

言っていることがどうも伝わっている様子がない。いくら嫌われているからといっても言葉が伝わっている様子がない、万次郎は不思議だと思えます。

そんなやりとりをしていて、「帰れ、帰れ」と言っているようなので、もうこれ以上ここで話をしていてもだめだと思って、仕方なく船に引き返します。

そして、漁をしながらグアム島付近に近づいた時、デビス船長が病気になってしまいます。精神病です。

そこで、一等航海士のエイキンが船長の代役となりますが、嵐にあい、万次郎が手助けをして、無事にフィリピンに船長を下ろしてアメリカ領事館にあずけました。

この時の万次郎が船を操る技術を、船員達はしっかりと見ていました。亀を仕留めた時の勇気といい、船乗りとしての技術といい、船員達はすっかり万次郎を信頼するようになりました。そして、船長が降りると船長なしでは航海はできませんので、次の船長を誰にするか。通常ならば一等航海士のエイキンが船長になるところなのですが、ここは民主主義のアメリカらしいところで、俺達の投票で選ぼうじゃないか、ということになります。30数人いたようですが、投票したところが、エイキンと食糧係の万次郎に同数の票が入りました。それだけ万次郎は皆から信頼をされていた。本当に信頼されていることを有難いと思った万次郎でした。そして、年上のエイキンに船長になってもらって、万次郎は副船長ということで航海を続けます。

そして、日本の仙台沖に差しかかった時、数艘の漁船に出くわします。そして、日本の漁船ですので、何か情報がもらえるかもしれないと思って、またボートを下ろして漁船に近づきます。そして、「この中で土佐に行った者はいないか」というようなことを伝えようと思いますが、どうも話が通じない。相手の言っていることは、東北弁な

んでしょうけど、何となくわかるような気がするんですが、こちらの言っていることがどうも話を通じない。ここでもまた気まずい関係になって、持っていたパンを渡して、「ありがとう」と言って別れてしまいます。

そして、ハワイに立ち寄ります。漂流してから別れた仲間がいるんですね。そして、皆に会うと、3人兄弟の真ん中の重助は病気で亡くなっていました。そして、隣人だった五右衛門が、万次郎の言葉を少し変に思います。「万次郎、おまん、日本語を忘れたんとちゃうか」と言います。その時やっと万次郎は、琉球でも話が通じない、そして、仙台沖でもどうも話が通じていないことの理由がわかった。

14歳で漂流してアメリカに上陸し、それから7、8年、全く日本語を使っていない、周りは英語だけの世界です。万次郎の会話は、もう英語になってしまっていたんですね。万次郎は幡多弁混じりの日本語を喋っているつもりなのですが、聞いているほうは、日本語なのか英語なのかわからない言葉を聞いていると、そんな状態だった。そして、仲間も日本に帰りたがっている。けど、お金もないし方法もわからない、というようなことですが、とにかく日本に帰りたいというような話をしています。

そして、万次郎も、今は、副船長という立場になっていることを伝えて、俺が連れて帰れるかもしれない、というような話もしています。そして、「I'll take you all back to Japan」というようなことを言って、「俺が、おまんらを連れて帰るけんおう」という言葉を残してハワイをあとにします。そして、母港のニューベッドフォード、フェアヘーブンに帰ってきます。航海に出て3年半後、万次郎22歳になっていました。

航海を終えてフェアヘーブンに帰った万次郎の手元には3年半の航海で350ドルという給料が入ります。350ドルは、当時のお金でどういうことかということ、1人の人間が1年間は楽に暮

らせるくらいの金額です。そして、ホイット・フィールド船長も万次郎が一航海で大変出世していることを喜びます。次は、俺と一緒に船で船長・副船長という立場で航海に出たい、と思っています。

ところが、万次郎は、早く日本に帰らなきゃいかん。あのボストンで見た黒船が日本に来る。そういう思いが沸々としています。船長に、実はこうこうで、というような話をします。船長も残念に思いつつも万次郎の帰国の話に賛同してくれます。ただ、350ドルでは俺1人なら帰れるかもしれないけれども仲間を連れて帰るとなるとお金が足りない。もう一度航海に出れば大丈夫かもしれないけど、そんな時間的な余裕はないな、と思います。

ちょうどその時に、アメリカの西海岸、サンフランシスコの山で金が見つかっていました。ゴールドラッシュです。1849年です。1849年の男達という意味で、そのゴールドラッシュに集まる者達をフォーティナイナーズと呼んでいました。万次郎もそのフォーティナイナーズのひとりになって資金稼ぎに出ることにします。

経費を節約したいので、木材運搬船の手伝いをしながら南アメリカまわりでサンフランシスコへ到着します。そして、ボートと蒸気船と馬車を乗り継いで金山に到着します。行ってみると、その金山は無法地帯。博打、恐喝、強盗、何でもありの世界でした。

万次郎も最初、雇われて金掘りをしていたんですけれど、1ヶ月ほど働いた給金を全て雇い主に持ち逃げされてしまいます。それからは、もう雇われてやっていちゃだめだ、自分で金を探そうということで砂金すくいに取ります。その時に拳銃を2丁買って、万次郎もカウボーイ姿になって、丁度私が着ているようなこんな姿ですね。それで砂金すくいに精を出します。

2ヶ月ほど砂金をすくっていると、600ドルの収入になりました。3年半の航海での350ドルと



比べても、どれだけ高い収入かがわかります。そして、それだけ危険度も高かったわけですね。600ドルもあれば、もう仲間と一緒に連れて帰るには十分です。そこで一目散に山を下りてサンフランシスコに到着してハワイに行く船を待ちます。

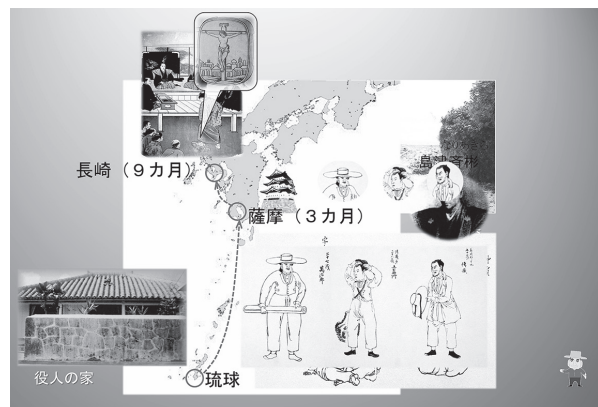
ただ、このまま日本に帰っていいんだらうか。ホイット・フィールド船長に何の言葉もかけずに申し訳ないな、と思いつつも、フェアヘーブンに帰る時間的な余裕はない、と思ったことでした。そして、20日ほど待ってハワイに行く船がやってきましたので、それでハワイを目指します。そして、重助はもう死んでいましたので、伝蔵、五右衛門、寅右衛門、この3人に声をかけます。伝蔵と五右衛門は喜びます。ただ、寅右衛門は、もうハワイで結婚しているので、俺はハワイに残るよ、ということで、結局、伝蔵と五右衛門と万次郎の3人で帰ろうということになります。

そして、その3人をデーモン牧師とハワイの人達は、大変応援してくれました。特にデーモン牧師は、パスポートがどれだけ役に立つものかわからんですけど、パスポートを用意してくれたり、上陸用のボートを準備してくれたり、大変よく世話をしてくれました。ハワイに残っていた仲間達が、どれだけ勤勉に働いて、どれだけ誠実に生活していたかということが、このことからわかるんです。日本人は、ハワイの人達からは大変好意的に思われていました。

そして、帰国の準備が整った頃、上海に行く船が入って来ました。サラ・ボイド号というお茶を運ぶ船なんですけど、その船で琉球沖まで運んでもらって上陸しよう、琉球沖10キロくらいのところで降ろしてもらおうと考えます。10キロといたら、かなり遠いんですね。サラ・ボイド号の船長は、もっと陸近くまで行ったらどうかと伝えてくれたんですけど、万次郎は、いや、ここでいいんだ。これ以上近づいて、俺達があ船から降りて来たということがわかったら、また上陸ができ

なくなるので、もうここでいいんだ、ということで、10キロくらい手前で降ろしてもらって、ボートで1日かけて陸を目指します。

ところが、その日も波と風が段々強くなってきて、上陸を目前にして日が暮れてしまいます。仕方がないので錨をおろして一晩そこで泊まります。夜が明けて見ると、波も風もおさまり無事に琉球に上陸できました。大渡浜というところですね。1851年2月3日、万次郎が無事に帰国できた日です。24歳になっていました。



琉球に降り立った万次郎達は、すぐに皆に見つけて役人の家に連れて行かれます。ただ、この役人の家では待遇が悪かったわけではなくて、大変好意的に万次郎達を扱ってくれたようです。

琉球というのは、その当時、薩摩の領地だったので薩摩に連れて行かなければならない。というよりは、実は漂流民といえども、日本に入ってくるのは、鎖国時代は長崎からなんです。だから、一度は長崎に連れて行く必要がある。けれども薩摩の領地なので、一度薩摩に連れて行きます。そして、薩摩では3ヶ月ほど留め置かれて、色々アメリカ事情などを聞かれています。そして、ここでカウボーイ姿からちょんまげ姿にも戻されます。

万次郎達から話を聞き取ったのは、薩摩の領主、島津斉彬。大変進歩的なお殿様でした。万次郎がアメリカから帰って来たということで、アメリカ事情を大変興味深く、島津斉彬自身が聞き取っています。そして待遇もかなり良かった。良

いもてなしをしてもらったようです。

この時、万次郎は、島津斉彬に、アメリカというの、日本のように侍に生まれたら侍だ、百姓に生まれたら百姓だ、そういうことではなくて、勉強して偉くなった者は上に立つんだ、そして、アメリカの文明はすごく進んでいるんだと、そのような話をします。

それを聞いた斉彬、このまま長崎に行つて、万次郎が思うようにアメリカの事情を話すと、アメリカ最良の人間が、日本人と認めてもらえるかどうか、とてもじゃないけど帰国するのは難しいだろうということ、斉彬は万次郎に入れ知恵をします。長崎に行くと、こういうことがある、ああいうことがある、これは言っちゃいかんとか、そういう話を万次郎に入れ知恵します。

そして、長崎に連れて行かれて、長崎では9ヶ月取り調べを受けます。普通の漂流民なら3ヶ月とか長くて6ヶ月なんです、9ヶ月も留め置かれています。万次郎が話す言葉が、日本語がちょっと混じったような英語なんで、本当に日本人なのかどうかというようなことも大変疑われ、9ヶ月もかかっています。ただ、踏み絵などというの、島津斉彬の入れ知恵だったんでしょうけれども、無事に皆、済ますことができました。そして、この長崎では、万次郎が帰国する際に持ち帰ったもの、拳銃だとか、時計だとか、地図だとか測量器具、そんなもの一切を没収されています。

ここで、また質問です。

日本に持ち帰った物、この中で、実際、持って帰ったものはどれか。これも三択です。

1番 万次郎が宇佐の漁師のもとに出かける時に、冬でしたので、お母さんから綿入れの半纏をもらっていたんですね。それをずっと持ちまわって持ち帰った。2番 宇佐の船主さんから、これはお守り用のナイフだ。ずっと持っておけよ、と言って渡されたナイフ。3番 無人島で寂しさを紛らわせるために作った貝殻細工。

はい、実はお母さんからもらった半纏。お母さんから14歳の時にももらった半纏が、24歳になって着られるとは思わないんですが、やはり、これだけは、日本人としての証を、証明をするためのものだ。あるいはお母さんのものだというようなことで、ずっと持ちまわっていたんだろーと思います。

土佐藩でも、そのあと、3ヶ月ほど留め置かれて色々事情を聞かれています。事情を聞き取ったのは、河田小龍という学者、絵描きでもあったんですけどね。土佐藩の学者です。その河田小龍が『漂異紀畧』という本に万次郎から聞き取ったことをまとめて、それが幕府の役人の目にとまることになる。漂異というのは、東南の方向に漂流するという意味ですね。それを記したものだということ意味です。

この漂異紀畧の中にどんなことが書かれていたか、ちょっと見てみましょう。

左側はスチームボート、蒸気船ですね。河田小龍は万次郎がスチームボートと言ったことをヒチンボールと聞こえたようで、ヒチンボールとフリガナをふっています。日本は伝馬船の時代ですから、蒸気で走る船があるんだというようなことを伝えました。

右側はレイルロード、汽車ですね。蒸気機関車ですけども、これも河田小龍には、レイロヲと聞こえたようですのでそういうフリガナをふっています。

この2つともわりあいきれいな絵を書いていますね。船と言う概念はわかったと思います。それから汽車というの、籠を連ねたようなものなんだということ、描けたようです。

ところが、伝わらなかったのがこれ。テレグラフ。テレカラフってフリガナをふっていますが、電信という意味です。この当時、もう既にアメリカは電氣を使って遠くの人達と話をしているんだ。そのことを一生懸命、伝えるんですけども、電氣という概念すら日本人にはないので、な

かなか伝わらない。

そして、これは河田小龍もさすがに絵にすることができなかったようで、万次郎が描いたものでしょう。

そして、この河田小龍のところに入ったりしていた男が9歳年下の坂本龍馬です。この当時、16歳くらいですね。

それから、高知を出て中浜に帰ります。

中浜に帰った時には、お母さんは仰天しています。もう万次郎は亡くなったものと思って墓まで作っていますので、大変驚きます。驚くどころの騒ぎじゃないですね。その夜は村中が大騒ぎになったようです。

このあとは、家族と一緒に平穏に暮らせるんだというふうに思っているんですけども、3日後に、また土佐藩から呼び出しがかかります。というのも、幕府はその当時、黒船で大騒ぎになっていて、アメリカを知っている万次郎という男がいるので、それを幕府で召し抱えようということになります。そして、万次郎が家に帰って3日後には土佐藩から勅使が来て、万次郎を土佐藩に連れて行きます。

土佐藩では、万次郎を幕府に差し出すには漁師のままではいかんということで武士の身分にします。その時に単なる万次郎という呼び名だけではいけないので、生まれ故郷の中浜という名字をつけて中浜万次郎というふうに呼ぶようにしました。

そして、1854年、日米和親条約が締結されて日本の港が開かれることになります。この当時、万次郎は、江戸で英会話の辞書をつくったり、それから、アメリカの航海辞書を翻訳したり、そういったことをしています。

そして、日米和親条約が締結して4年後、1860年、幕府は、アメリカのポーハットン号という船で、幕府の使節団を遣わそうということになります。ところが、アメリカ人に連れて行ってもらうのは癪だなということで、日本でも、日本人の手

でアメリカに行こうということで、ポーハットン号に随行するようなかたちになるんですが、咸臨丸という船でアメリカに行くことになります。



咸臨丸の艦長は勝海舟ですね。この咸臨丸に万次郎は通訳兼航海士ですが、正式には通訳として乗り込みます。艦長の勝海舟は近海では練習はしたんですけど、外洋では練習していない。外洋に出てみると船は大揺れで、日本人の船員は皆、船酔いに悩まされて何ともなりません。そこで万次郎が一切を仕切ってアメリカに咸臨丸を航海させます。そして、咸臨丸はポーハットン号より10日ほど早く、アメリカに着いていますので、どれだけ万次郎の航海技術が高かったのかということがうかがえます。

その時に、咸臨丸に別の手段で乗り込んでいたのが福沢諭吉。万次郎は、この福沢諭吉に英語を教えていたということもあって、諭吉を従えてサンフランシスコのとある本屋に立ち寄ります。そこで、ウェブスターの英語の辞書を、これは本当に大事な辞書だから買っていきなさいということで持ち帰らせています。

そのサンフランシスコの本屋の店主は、英語を流暢に話すちょんまげ姿の男達に、本当に目を丸くしたようです。

そして、咸臨丸航海から帰ってみると、日本の小笠原諸島、父島、母島に、どうもアメリカ人が住み着いているらしい。そして、アメリカの国旗が揚がっているぞというような話がもちあ

がってきます。そして幕府は、英語が話せる万次郎を、その当時、日本の捕鯨船もできていたので、その捕鯨船の初航海も兼ねて、万次郎を小笠原諸島に行かせて、住んでいる人と話をつけさそうということで、万次郎を小笠原諸島に向かわせます。そして、万次郎は、そこに住んでいたアメリカ人と交渉して、ここは、日本の領土なんだ、というようなことを主張します。でも、おまん達をアメリカに帰らそうと言うつもりはない。住んでいいけれども、ここは日本の領土だ、というようなことを主張して、小笠原諸島、父島、母島の領土権を確約させます。そして、この途中で、万次郎たちが漂着した無人島にも立ち寄って、そこには日本属島鳥島という旗を掲げて、初めてそこで「鳥島」と命名されるわけですね。

そのようなことをして、日本にまた帰ってきて、土佐の開成館、そして、薩摩の開成所、薩摩は島津斉彬の関係で呼ばれたんですけど、そういったところで航海術とか英語を教えています。そして、薩摩の開成所での任期が終わって長崎に滞在していたとき、慶応3年11月15日、京都では龍馬が暗殺されてしまったわけですね。そんなことも知る由もなく、万次郎は長崎から江戸に向かいます。

そして、江戸に帰った万次郎は、開成学校の教授を務めます。開成学校というのは、東大の前身ですね。そこに最初に5人の教授がいたようですが、その5人の教授のひとりとなって英語だとか航海術だとか、そういったことを教えています。

その開成学校の教授をしているときに、ヨーロッパでちょっときな臭い状態になっている普仏戦争というのが起こり始めているということで、幕府から、その普仏戦争を視察に行つて来いという命令が出ます。そして、ボストン経由でヨーロッパに向かおうとします。そして、ボストンで3日間くらいの滞在休暇がありました。



ボストンから、ホイット・フィールド船長の家があるフェアヘブンは近い距離にありますので、その滞在休暇を利用して懐かしのホイット・フィールド船長の家を訪ねます。そして、コンコン、ドアを開けます。中から、ちょっと白髪のご婦人が出て参ります。万次郎にはすぐわかります。「奥様、ジョンマンでございます。ただいま帰ってまいりました」というようなことで、万次郎は20年ぶりに奥さんと、それからホイット・フィールド船長と再会をします。その夜は、船長の家は大騒ぎ、町中が大騒ぎになったようです。

今、お話してきたように、実践時代、貢献時代も足早に見てきましたが、そのいずれも体験時代に身につけた「諦めない、投げ出さない、人の役に立つ」というジョンマン・スピリットをみることが出来ます。そのジョンマン・スピリットの基礎になったのは、何と言っても、「とにかく一歩を踏み出す」というDNAではなかったかというふうに私は思うわけです。

そして、私自身、このDNAを大事にしたいなと。このDNAは万次郎だけのものかというのと、よく考えてみると、誰も持っているDNAだというふうに私は思います。ただ、その一歩を踏み出すというDNAを呼び覚ましているかどうか、眠ったままにしているかということですね。

そういうことに気が付いて、私は私自身、そのDNAを呼び覚まそうということで習慣にすることがひとつあります。それが、「3D言葉を

捨てて3 C言葉を」ということです。3 D言葉というのは、「でも」「だって」「だけど」。このほかにも、「どうして」「どうせ」「どうでも」とかですね。D言葉で始まる言葉は、本当にネガティブな言葉で、そして、そんな言葉が出そうになった時には、とにかく、「チャンス」「チェンジ」「チャレンジ」この3つのC言葉、3つだけでいいので、この言葉を言ってみようということを私は習慣にしようと思いました。

仕事でも、ちょっと苦しい状況になった時、行き詰まった時、同僚なんかとも、ここは「チャンス」「チェンジ」「チャレンジ」だよねって言ったりすると、この苦しい状況に含まれているチャンスは何か。それをチャンスにするためには、私はどう変わったらいいか、どうチェンジすればいいか。ダメもとでやってみようじゃないか、チェンジ。この3つのC言葉を同僚達ともよく言ったものです。そうすると、何となく前向きになれるということがあって、今でも私はそれを大事にしています。

そして、44歳でヨーロッパの視察に行った万次郎ですけど、そこで脳溢血になってしまいます。



それ以後は、歴史の表舞台に出ることはなく71歳で亡くなっています。71歳ですから、龍馬なんかと違って、かなり長生きをしました。そして、今は東京の池袋の近くに雑司ヶ谷霊園というところがあるんですが、そこに万次郎は眠っています。

私は、つい先日も万次郎の墓にお参りをして、こうこうで、また中四国の人達に、万次郎、あんな

たのことを話させてもらいますからということで報告もしたことでした。

はい、ここでまたキャラクターが出てきましたので、ちょっと見てみましょう。

これは最初のクイズです。ジョン万次郎、ジョン万、中浜万次郎。万次郎が呼ばれたことのない名前はということ。もうおわかりですよ。

これは、ジョン万次郎。

私達が一番よく使っている呼び名、ジョン万次郎なんですけど、万次郎自身はこの呼び名を知らないんです。どうして私達は、ジョン万次郎という呼び名を使っているかということ、昭和12年、井伏鱒二という小説家が、「ジョン万次郎漂流記」という本を出したんですね。これがきっかけとなって一般庶民にもジョン万のことが伝えられる。そして、私達はそれ以後、ジョン万次郎という呼び名を使い慣れているわけですね。このことがきっかけで、私達は万次郎のことを知ることになって、そして、皆さんに、こういうふうには私自身が伝えさせてもらおうようになったということです。

はい。以上、ジョン万次郎のジョンマン・スピリットの紹介をしましたけれども、その基礎となっている、とにかく一步を踏み出す、これを私達は目覚めさせたいなと思っています。そして、この「諦めない、投げ出さない、人の役に立つ」ということは、今、世界で活躍している多くの一流の人達に全て見ることができます。

でも、その「諦めない、投げ出さない、人の役に立つ」に限らず、スピリットというものは、万次郎のことを見ても、それから、一流の人達を見ても、それから、私のことをふりかえっても、24、25歳までに身につけると、そのことが運命をひらくことになる。

「Get your spirit for the future」というようなことで話を締めくくって子ども達には伝えていきます。

今日は、中四国の皆さんがお集りになってい

ますので、是非、中四国の皆さんも、「Get your spirit for the future」ということを子ども達に伝えていただければありがたいなと思っているわけです。

以上で、ジョン万次郎に関する私の話を終わらせていただきます。どうも、ご清聴ありがとうございました。